

## 小説・江戸神仏歳時記 (14)

## 芝大神宮



## 郡 順 史

「芝で生まれて神田で育ち、今じゃめ組の纏持ち」  
下町育ちの江戸っ子を唄った俗謡である。芝の  
大神宮さん（神明さん）は、その芝の真ん中に在  
り、め組の火消たちに護まわれていた。

しかし現在の東京に住んでいる我々庶民は、芝  
の大神宮さんとときくと、まず思いつくのは「だら  
だら祭り」「火消しと角力取りの大喧嘩」「のどど  
胃腸に効く神明生姜」それと「厄落としのご靈験」  
であらう。

が、大神宮さんの本当のお姿は、こんな通俗的、  
いや庶民的なものではない。

芝の大神宮さんは本家の伊勢の大神宮さんと同  
じで、社格も尊く高く歴史も事跡も幽遠で奥深い。  
だからこそ徳川幕府もおろそかにせず、三百年の  
長きにわたって信仰と護持を続けたのであらう。  
現今でも幕府に代って奉賛会の会員企業は二百社  
を超えているという。

神社のご由緒書きによると、ご創建は今を去る  
一千余年前の平安時代の寛弘二年（一〇〇五）時  
の天皇の一条天皇の関東・東北鎮護の御趣旨によ  
り、天照皇大神と豊受大神を町祭神としてお祭り  
したものであると。以来、産土さま、鎮守さまと  
して、土地の庶民をお守りし且つ信仰を集めて今  
日なお栄っておられるのである。

戦国時代末期の慶長年間（一五九六〜一六）に麻布飯倉町から現在地に移され、より便がよくなった故もあつてか、「関東のお伊勢さま」とよばれ、お伊勢さま詣うでに行きたくても行けない老人や女子どもたちには大変よろこばれ、お参りと祭礼を楽しみにしたという。（当時の人々は一生に一度はお伊勢さま詣うでを必ずするものと信じていたのである）

そのご祭礼は、九月十六日だが、はじまりは九月十一日から二十一日まで十一日間続いた。普通の神社のお祭りはたいがい三日間ほどが一般的だが、大神宮さんはずばぬけて長かった。そこで口の悪い江戸っ子は、「神明さんのだらだら祭り」つまりだらだらいつまでもやっているという意味である。

そのくせ氏子たちは、日が経つにつれ近在近郷からも多くの人々がやって来て、出店、見世物小屋、芝居小屋がいよいよ繁昌するので、口とは反対に自慢たらししく小鼻をうごめかせていた、という笑い話がある。

この出店の中で一際目につくのが「生姜」を売る店、生姜市である。江戸名所図絵にもこの生姜市にむらがる男女が克明に描かれているが、名物名産といえ何故と不思議に思うほど繁昌しようだ。やはり薬効が有ると同時に食しても美味であったからであらう。

この生姜の初生には左の如き面白い伝説がある。

まだ現在地に移る前の飯倉山時代と言うから、多分時代的には徳川氏が江戸へ来る以前、永祿か元龜・天正（一五五六〜一五九〇）の頃か、一人の山男のような男が、飯倉山にあらわれた。

男は毎朝夜明けと共に境内にあらわれると、境内の隅々まできれいに清掃し、了ると裏の荒地を一生懸命に耕したりした。

それが十日、二十日と続くと、宮司さんも不思議に思い、ある時声をかけた。

「どこのお方が存じあげませんが、毎朝掃除して下され有難いのですが、何か目的でもあるのでございませうか？」

すると男は柔らかな微笑を泛かべて答えた。

「私は伊勢國の松坂の生まれの玄助という者でございます。去る夜、夢に大神宮さまがあらわれ、関東の大神宮へ行つて清掃し、後にこれを植えよ、薬効あらたかなれば衆庶大いに救われるべし、と仰せられて生姜の苗を下しおかれまして。ゆえに掃除をし裏の荒地を耕しているのでございます。ご迷惑でございませうか？」

「いえいえとんでもない。どうぞお続け下さい。お通いなさるのが大変でしたら、境内の隅に小屋でもお建てになったら如何ですか」

玄助はその宮司のすすめに従つて掘立小屋を建て、そこに寝起きし毎朝あきもせず清掃と荒地を

耕し続けた。

そして半年ばかり経った。

ある朝、宮司は拜殿の前に山ほどの生姜が積み上げられているのを見た。が、呼べど探せど玄助の姿は見えない。小屋を覗くときれいに片付けられ塵ツ葉一つ落ちていない。

——ああ、伊勢へ戻られたに違いない。

そう思つて宮司は生姜を手を取つて見る。どれも見事というしかない丸々と肥えている。

宮司は思つた。

生姜は神明に通じ悪気穢毒を払うもの（本朝医方伝）とされている。神薬の効能あらたかなものなのだ。これはあの玄助さんを通しての神明さまのおさづけ物に相違ないと信じ、近所の風邪をひいている者、お腹の具合の悪くなった者に与えて飲ませると不思議に爽快になつて治つてしまった。

以来、芝神明の生姜は、神薬として安価に庶民に分け与えられ続けているのである。むろん生でガリガリ食べるのではなく、生姜湯にしたり、お菓子や料理にしたりするわけである。

## 二

更にもう一つ、後に芝居や浪曲、講談にまでなつて江戸っ子の血肉を湧かせた有名な事件がある。

「め組の喧嘩」芝居では「神明恵和合取組」と名

付けられた「め組の火消しと角力取りの大喧嘩」である。

時は今より二百年前の文化二年（一八〇五）二月の事である。

丁度お祭りの最中。今とくらべものにならない広い境内のあちこちには、芝居小屋や見世物小屋、角力場、講釈落語小屋などが立ち並び参拝の庶民を愉しませていた。

事件はその見世物小屋の一軒から起つた。め組の若い鳶の者が、肩をゆすつて小屋の中へ入つて行こうとした。すると木戸番をやつていた角力取りの若い衆から、「おい若いの、どこへ行く！」と襟首を掴まれて引き戻された。

「何をしやがる！芝居のぞきにきまつているだらう！」

若鳶は首をふつて角力取りの腕をふりほどいて怒鳴つた。

角力取りも若鳶に負けない大声で怒鳴りかえした。

「中へ入るなら木戸銭を払つて入りな！」

「なにッ、てねえ、藤四郎か！ご当地め組の鳶は、どこの小屋も木戸ご免なんだ。おほえておきな！」

なおも中へ入ろうとした。そうはさせじと角力取りは再び襟首を掴えて、今度はうしろへぽんと投げた。力のある角力取りに投げられたのだ、若

鳶は三間も飛ばされて尻持ちを突いた。

が、威勢を売りものにする鳶が黙っているはずはない。ぴよんと飛び上がると、「やりやがったな！」と叫んで殴りかかった。

しかし喧嘩じゃ体格が違う。鳶はぼんぼんはじき飛ばされて喧嘩にならない。

畜生！一人じゃかなわねえ。と思ったのか若鳶はいきなり駆け出すと、境内の火の見櫓に駆け登り、仲間集めの半鐘をカンカンと鳴らした。

「なんだ、なんだ、火事か喧嘩か！」  
たちまち大勢の鳶が集まって来た。

「あの水ぶくれが、おいらに喧嘩を売りやがった。この通りだ！」

若鳶は左腕を見せた。血がたれている。

「野郎、神明さまの境内でめ組の若い者に血を流させるとは許せねえ！おい、野郎をやっちまえ！」  
今度は角力取りも多勢に無勢、かなわぬと思つて「助けてくれ！」と仲間の角力取りに声をかけた。

おお、応えて仲間の角力取りが、あちこちから駆け集まって来る。

双方、三十人から五十人、はじめは入り乱れて素手で殴り合ったり取っ組み合いで喧嘩をしていたが、そのうち鳶が火消道具の鳶口を振りまわしはじめ、角力取りは角力取りで負けじと丸太ン棒で応戦し、人数も両方とも増えて、二百人からの

人間が怒号をあげあつて入り乱れての大喧嘩というよりも、まるで戦争状態にまでなつてしまった。

参詣人は悲鳴をあげて逃げまどい、転んだり誤つて殴られて怪我をしたりしてこれまた大混乱。神官たちだけでは終止がつかなくなり、とうとう寺社奉行所へ訴え出た。そして奉行所の捕手たちの出動によつてようやく治りがついた。

以上がいわゆる「神明恵和合取組」俗に言う「め組の喧嘩」の大ざっぱな終始であるが、その結果が面白い。如何にも江戸の大喧嘩らしいシヤレた裁きでおさまるのである。

追放者双方で六名。過料双方五十貫文。だが鳶に死者が一人出たので角力方で九両二分の見舞金を払う。

以上のお裁きだが、これでは喧嘩の原因者が罰せられていない。原因は、勝手に鐘が鳴つたその鐘が不埒千萬と、鐘に罪をきせて三宅島に遠島を申し渡し、一件落着ちなつたのだった。まるで落語のオチのよう。

しかもほどなくその鐘は許されて大神宮さんの火の見櫓に戻され、人々の話題の種になつたという。

## 三

さて生姜の葉効、め組の喧嘩と述べたら、もう一つの大神宮さんの名物を記さなければ画龍点睛

を欠くことになりそうだ。

それは、神明の「千木筥」である。

現今では神明さんだけの名物ではなく、東京の郷土玩具として何処でも売られているが、そもそもがその昔神明さんの神官さんの一人が、趣味と実益をかねて藤蔓で器を編み、餅を盛る餅器として作ったのがはじめで、それが実用兼飾り物に転化したもの、という。材料は神社の神明造りの屋根の古千木を活用したという説もある。

以前は餅器や食物入れ（弁当箱にも）として使われていたが、そのうち女の持物として小型化し、泥絵具できれいに装色され、中に二、三粒の煎り豆を入れ、振るとからからと音がし、雷除けの呪いものになると、祭礼の縁起物として変化し、売られるようになっていった。

型は、全長（十一センチ）経木小判型の曲物に仕立て、もう一枚の平らな経木でふたをし三つ重ねにして藁でくくって、小指でも支えられるほどに軽くしてある。

だから五つ六つの小さな女の子でも持つて歩くことが出来、時には中の煎り豆を食べたりして母親から、

「食べちゃダメよ。雷さんが来たらどうするのよ！」と叱られてペソをかく、ということもあつたようだ。

年頃の娘になると、煎り豆を食べるよりもその

名前の千木に縁起をかつぐようになった。「千木筥」の千木を「千着」と言い直して、着物が千着持てるようになる、というわけである。だから持ち歩かない時は箆笥の中に大事にしまふようになった。

この縁起かつぎがやがて母親にも伝染し、またたく間に女一般に流行を生み、そして神明名物になったという、流行やファッションは女から、というのは、今も昔も変わらないようだ。

更にもう一つぜひに付け加えなければならぬ話がある。

江戸名所図会を見ると、大神宮さんの生妻祭りの賑わいを描いたその門前に、「大好庵」と書いた大看板の店がある。

この店は、生薬屋で、門前の町医者が店主。祖先伝来の「長命薬」と称して「万金丹」や「金粒丸」という薬を売っていたという。

江戸時代の庶民の多くは、病気になると思者代が高価なのでおいそれと呼ぶ事も出来ない。それでこうした売薬に頼ることしか出来なかつたのであろうが、しかしこの生薬屋の薬は、越中富山の「反魂丹」に劣らぬ薬効があり、しかも値段が安かつたのでよく売れたとある。が、それよりも何よりも、伊勢では伊勢名物との評判が高かつたという。

江戸時代、あちこちに「伊勢講」があり、講中で金をため、毎年その金で代表がお伊勢参りをし

た。そしてその帰途、講中の人々への土産に、この「万金丹」を買って帰ったものだった。

中にはずるい代表がいて、貰った金を品川あたりの遊女に入れこんで、この大好庵で「万金丹」を買って、「はい伊勢みやげだよ」と講中の者に配った奴がいた、という話もあるが、こんな奴はきつと大神宮さんの神罰が当たったに相違ない。

以上いろいろと書いたが、こうした物品などは姿を変えたり消えていったものもあるが、神社そのもののご利益は少しも劣えていないようだ。

筆者がおとずれた日、ちょうど結婚式があり、紋付羽織袴の花婿と文金高島田に花嫁着物の花嫁さんを見かけた。

いいな、と半分以上うらやましい視線を送ると、花婿さんと眼が合った。花婿さんはむろん声は発しなかったが、何ともいえぬ倅そうな笑顔を見せた。

嬉しくなつて、神前に手を合わせ、お二人の倅を声を出して祈念した。

きつとご利益多々の神さまゆえ、願をききいれてくれ、お二人を倅にして下さることであらう。

さるにても一千年も参拝する人々に倅をあたえて続けてやっているとは、神さまも大変だな、と、なぜか今回の「江戸神仏ご利益めぐり」では殊のほか感慨を抱いたのであった。

さて最後に、この有徳な大神宮さまへの行く道

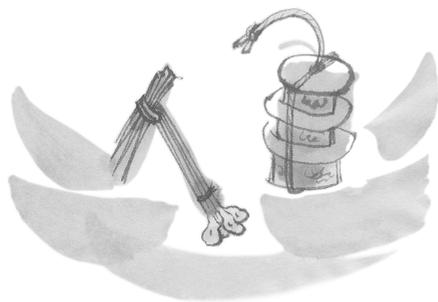
を記しておこう。

JRは山手線の「浜松町駅」で下車し、北口を増上寺へ向かって徒歩五分、四ツ角を右に曲った右側。地下鉄は「大門駅」で下車、地上の駅口へ出ると一分とかからない。

神社は今は小じんまりとしているが、拜殿の前に、め組献納の狛犬が向合つて鎮座しているのが印象的だ。

—おわり—

(次回は神田明神の子定)



■訂正とお詫び

酒林第七十二号に誤植がありました。  
左記の通り正誤表を記載させて頂きます。

正 誤 表	
誤り	正
七頁、三行目の決まっていない	決まっていない
七頁、五行目のつくるべき	つくるべく

■ぎょうせん飴（表紙説明）

三木町池戸の三原飴店は、九世代、二八〇年にわたって伝統的な「ぎょうせん飴」づくりを継承する老舗である。かつては讃岐の各所でつくられていた凝煎飴だが、現在、昔ながらの飴づくりを続けているのは、三原飴店ただ一軒となっている。

香川県木田郡三木町大字池戸三七四六一二  
TEL／〇八七―八九八一―一三七七  
FAX／〇八七―八九八一―四三七〇  
定休日／毎週木曜日

「酒林」随筆特集 第七十三号  
平成十九年一月一日号  
発行人 西 野 信 也  
印刷人 太陽印刷株式会社  
高松市亀井町二番地八  
発行所 西野金陵株式会社

万一乱丁・落丁がありましたら、「一報下さい」。